



### 第3回 ジャパニストの集い

# 濃密な歓喜の空間

2013年3月15日、神楽ビルにて第3回「ジャパニストの集い」が開催された。会社経営者、芸術家、政治家、伝統芸能家、本誌執筆者など、多士済々が集い、「Japanist」がそのままりアル空間に。



タイトルの上／東洋思想研究家の田口佳史氏と本誌編集長・高久のトーク。テーマは「愉しく生きるコツ」  
左上／『結わえる』の寝かせ玄米おにぎり  
左下／盆栽作家・森前誠二氏の作品を展示  
右上／ミネ/ハさんの絶唱に会場全体が酔いしれた

靖国神社の桜が花開かんとする三月十五日。早春の宵にふさわしい宴が、新宿区市ヶ谷田町の神楽サロンを会場に開催されました。第三回目を迎えた「ジャパニストの集い」は、本誌の定期購読者だけが参加できる特別の一夜。全国から集まった懐かしい顔と声。旧交を温め合うなか、第一部のミネハハさんのステージで幕開けとなりました。

本誌第六号でもご紹介したように、彼女は知る人ぞ知る「CMソングの女王」。関わっ

たCMの数はなんと三千本にもおよびます。個々の企業名はあげませんが、日本で生活している人ならば必ず知っているであろうCMソングやナレーションの数々がたてつづけに披露され、たちまち笑いと驚きの声が湧き起こりました。もちろん「本業」である歌の素晴らしさはいまでもなく、母子の愛や地球への感謝など、私たちがつい忘れがちになる大切なことを切々と歌い上げる姿に、会場のあちこちで目頭を押さえる人が……。天に選

ばれし者だけが持つ歌声に、会場から惜しめない拍手が送られました。

続く第二部は、本誌連載でもお馴染みの東洋思想研究の大家、田口佳史氏が登壇。田口氏を師と仰ぐ本誌編集長の高久が、「愉しく生きるためのコツ」をうかがいました。

二十五歳のときに体験した大事故。水牛の角に胴体を突き破られ、内臓が飛び出るほどの重傷を負った田口氏。死線をさまよった末にたどり着いたのは「白髪の老人との默契」でした。進むべき道筋を見定め、中国古典の研究に生涯を捧げる決意をした田口氏は、以後、骨の髄まで染みこむような壮絶な学びに没頭します。

そんな田口氏にとって、「愉しく生きるコツ」もやはり学びに帰着すること。いい音楽と酒をお供に、本を読みふける。それが何より至福の時だとお話になりました。

第三部も引き続き田口氏が登壇し、「日本とは何か」という壮大なテーマについて講話をいただきました。予定時間三十分という制約の下、田口氏が簡潔に語った日本の特質は「森林・山岳・海洋・島国国家である」ということでした。

周囲を海に囲まれた島国であることで、大陸から流れ込んだ多くの思想や哲学が日本列島にとどまり、あたかも味噌や醤油のように発酵する。これを田口氏は「たまり文化」と表現。古来より存在する神道思想に、仏教、道教、儒教、禅宗を加えた五つもの思想・哲学が開花した国は日本以外に存在せず、この希有の精神性が日本の大きな特質であると力

説されました。

さらに、急峻な山が作り出す清流のごとき「清明心」が日本人の心の有りように及ぼす影響にも言及されました。その代表例が武士道に伝わる「名こそ惜しけれ」。正当でない方法で他人の権利を剥奪するような輩は、たとえ法によって罰せられずとも、人々の心が許さない。清らかな心を保つことがリーダーの資質として強く求められる風土も、元をたどれば清明心に行き着くのだというとてもシンプルな理に、メモを取りながら熱心に耳を傾ける来場者の皆様も、大きくうなずいておられました。

そして第四部の懇親会は、会場を二階から三階に移し、一転してにぎやかな雰囲気にはせがわファミリー作の「スターリイマン」がギャラリィに、本誌第十六号で特集した盆

裁作家・森前誠二さんの作品が茶室に展示され、サロン全体に豪華な彩りが添えられました。

食卓には、「集い」ではもうお馴染み、津川清子さんの燻製『妙之燻上』の数々、台東区蔵前にある『結わえる』特製の心と体に染み渡る食事が供され、来場者の方々も、これを楽しみにしていたのだとばかりに舌鼓。特に寝かせ玄米のおにぎりは米の旨さがとことん凝縮していて、「旨い純米酒を求めて」で取材した富山の『勝駒』、栃木の『仙禽』から届けられた絞られたの純米酒とともに喉に流しこむ瞬間は、「日本の食の粹、ここにある！」と快哉を叫びたくなるような極上の味わいでした。

紙媒体たる『ジャパニスト』にとつて、「集い」は、読者の皆様との貴重な交流の場。し

かし何といつても、日本を愛する人々同士が、極上の日本文化を心ゆくまで楽しむ空間であり、田口氏がいみじくも指摘された「たまり文化」の現出だといえるでしょう。すべての来場者がふつと発酵し、旨味を醸し出した時間は、まさに本誌の目指す「媒体」そのものでした。

談笑の輪は夜がふけてもほどける気配がなく、誰もが名残を惜しみながらの散会となりました。幕を下ろした会場には、宴のあとを物語る熱気がかすかに残っていました。

どこまでも爽やかで、温かで、ポジティブな人々。本当に素晴らしい読者、関係者に恵まれていることへの深い感謝で一杯です。これからも『ジャパニスト』をよろしくお願ひ致します。ありがとうございました。(佐藤)